

## かんろだいの石普請 ②

前おやさと研究所長  
深谷 忠一 Chuichi Fukaya

石の“かんろだい”建築についての記録はあまりなく、それがなぜ頓挫したかの理由を探るのはなかなか困難ですが、その当時の人々がかんろだいについてどう思っていたのかを示す一例として、『正文遺韻』114頁に「甘露台大阪へ注文」という話があります。

明治□年、教祖様お神楽勤めをおせき込みの時、かんろふだいをすゑる心はなきやと、きびしく仰せられた。そこで、若江村の市兵衛様と、コシキダイ村の富さんといふ（本名久治郎）人と、相談して、河内へ行き、山本様親子の人々とも相談して、同道にて大阪へ出で、或る石屋へ、甘露台の石を注文して、よろこび勇んで御地場へ帰り、この事、神様へ申上げると、神様御立腹にて仰せらるゝには、『かんろふだいはな、ひとりやふたりのはらですのやないで、一れつの心からすゑねば何にもならんで』と、おしかりを蒙りければ、四人は案に相違して、大いに恐れ入り、御わびを申上げ、すぐ様注文を取消したる事ありと。

このエピソードから分かるのは、教祖のお急ぎ込みに応えなければならぬと思っていた当時の熱心な信者でも、“かんろだいはどこかの誰かに注文して作ってもらえばよい”くらいの認識であったということです。まあ、立派な石灯籠を作って御供えすればよいだろうくらいの感覚だったのではないかと思えるのです。

また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』の82話「ヨイショ」では、明治十四年、おぢばの東、滝本の村から、かんろだいの石出しが行われた。この石出しは、山から山の麓までは、真明組の井筒梅治郎、山の麓からお屋敷までは、明心組の梅谷四郎兵衛が、御命を頂いていたというが、その時、ちょうど、お屋敷に滞在中の兵庫真明組の上田藤吉以下十数名の一行は、布留からお屋敷までの石引きに参加させて頂いた。（後略）

と述べられていて、大勢が石出しに勤しんでいる状況が分かります。しかるに、一方、「教祖伝史実校訂本下一」（『復元』第37号参照）には、

「石屋が居なくなつて了うてから、まんなかの柱石なんかは漬物の重しに使つたりしているうちに何処かへなくなつて了うた。」

というような話（高井猶吉談）が残されています。

多くの信者の真実によって山から運ばれた“かんろだい”を作る原石ですから、かりにその石をすぐに削ることができない事情が起きても、他日を期して大事に保存しておくということに、今考えればなると思ひます。しかし、その“かんろだい”作製の原石を、漬物を漬ける重しに使う。そして、それがいつの間にかどこかに消えてしまう。倉の中は無理でも、庭の隅か縁の下にでも、“これは特別な石として確保しておく”というくらいの意識さえ、当時は誰にもなかったということでしょうか。

「おふできぎ」には、

めつらしいこのよはじめのかんろたい  
これがにほんのをさまりとなる (2号39)  
このだいをどふゆう事をもている  
これにほんの一のたからや (17号3)

とあるのですが、当時の人たちは、「おふできぎ」を直接目にする機会もほとんどなかったと思われるから、信仰心の篤いと思われた人でも、必ずしも教祖の思召の真相を理解していたとは言えないということかも知れません。

ところで、この“かんろだい”の石普請と似た状況が、その17年前にもありました。皆が勇んで取り掛かった“つとめ場所の建築”が、その途中に大和神社事件が発生して頓挫しそうになった。しかし、その時は、大工の飯降伊蔵の真実と中山家の当主で施主の秀司のバックアップのお蔭で、9月の手斧初めから3カ月で落成しています。事件が起きて大方の人が手を引いても、現場の責任者の大工が最後までやり遂げる決意で建築をすすめた。そして、その大工の意気に応じて、施主がその費用を、年切り賃が済んで返ってくる田畑を売って賄おうとした。それで“つとめ場所”が無事落成したのです。

“かんろだい”の石普請の時の現場責任者の石工の横田七次郎も、盲目になった時におぢばに帰って助けられた人ですから、信者ではあつたと思ひます。しかし、飯降伊蔵が手間を御供えして毎日勤めたのに対して、七次郎には4カ月間での実働67日に対して36円50銭の賃金を受け取り、石工の道具も買い揃えてもらっています（『ひとことはな志その二』178、186頁参照）。つまり、現場責任者の覚悟・精神が、つとめ場所の時と全く違っていたと申せましょう。

また、石普請が始まったのは、秀司が出直した直後であり、残された31歳のまつゑ、16歳の眞之亮に、つとめ場所の普請の時の秀司と同じような施主としての責任を期待するのは、無理であつたとも思ひます。

31歳で未亡人になったまつゑには、別火別鍋での教祖へのお仕え、5歳の娘たまへの養育、庶子音次郎の養子縁組、眞之亮の入籍、増井りんや飯降母子など住み込み人の世話等の家内のこと、また、蒸し風呂と宿屋の営業、転輸王講社の引継ぎ、帰参者の受け入れの用務に加えて、度重なる官憲からの干渉への対応などがあり、その上での“かんろだい”の石普請ですから、それに十分に対応するのは至難の業だつたと思ひます。

また、前年の明治13年に中山家に入籍したばかりの眞之亮は当時まだ16歳。家督を相続したのも石普請の翌年の明治15年ですから、つとめ場所の普請の時の秀司のような施主としてのリーダーシップを発揮することは難しかったと思ひます。つとめ場所の普請の費用はほぼ中山家の資力で賄われましたが、石普請の方は、信者からの総計84件103円91銭の寄付で賄われるべしで進められており、中山家の私的な財力によって始末する体制ではありませんでした。ですから、若き眞之亮が石普請頓挫の後始末の付け方を明確にするのは難しく、途中で石工が居なくなつてもそのままになつてしまつたのではないかと思ひられるのです。

同じおつとめ完成への道すがらにおいての建築作業でありながら、教勢がまだあまりなかつた時代のつとめ場所の普請は“ふし”を乗り越えて完成し、教勢盛んになつた後の“かんろだい”の石普請は頓挫している。その原因がどこにあつたのかを考え、そこから今の我々が学ぶべき“ひながた”は何かを考えるのも、大事なことだと思ひ次第です。